

Title	ドイツ的経済言説：形成、受容とその後
Sub Title	German economic discourses : formation, diffusion and after
Author	池田, 幸弘(Ikeda, Yukihiro)
Publisher	
Publication year	2019
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2018.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>ドイツの経済思想はかつては一世を風靡した経済思想で、少なくとも第一次大戦勃発前までは支配的だったが、今日その意義を理解するものは少ない。ドイツの国際的な地位、とくにEUにおけるそれは依然として高いが、かつてのそれとは比肩すべくもない。また、いわゆる「グローバリゼーション」によって経済学の標準化が進み、各国、各地域固有の思想、とくに経済思想というものはなくなってきている。このような経済学の在り方は必然ともいえるが、国や地域が重要な役割を果たした時代の政治経済思想に思いをはせ、逆に現代の経済学の在り方を照射することは必要な作業である。本研究計画では、ドイツ経済思想の生成、受容、変容を明らかにした。</p> <p>Germany's economic thought used to be dominant at least well into the period of the outbreak of WWI, but today there are only few who understand its significance. It is a forgotten discipline. Germany's international status is still high, especially in EU, but not as high as it used to be in world politics before. Also, with the so-called "globalisation", standardisation of economics has progressed, and the ideas unique to each country and region, especially political and economic ideas, disappeared. Although such a state of economics is inevitable, but it is necessary to reflect on the political and economic ideas of the times when countries and regions played an important role, and conversely, by doing so, it is possible to irradiate the state of modern economics today. In this research, we clarified the formation, acceptance, and transformation of German economic thought.</p>
Notes	<p>研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2015～2018 課題番号：15K03385 研究分野：経済思想</p>
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_15K03385seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月6日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03385

研究課題名(和文)ドイツ的経済言説：形成、受容とその後

研究課題名(英文)German Economic Discourses: Formation, Diffusion and After

研究代表者

池田 幸弘 (IKEDA, YUKIHIRO)

慶應義塾大学・経済学部(三田)・教授

研究者番号：80211720

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツの経済思想はかつては一世を風靡した経済思想で、少なくとも第一次大戦勃発前までは支配的だったが、今日その意義を理解するものは少ない。ドイツの国際的な地位、とくにEUにおけるそれは依然として高いが、かつてのそれとは比肩すべくもない。また、いわゆる「グローバル化」によって経済学の標準化が進み、各国、各地域固有の思想、とくに経済思想というものはなくなってきている。このような経済学の在り方は必然ともいえるが、国や地域が重要な役割を果たした時代の政治経済思想に思いをはせ、逆に現代の経済学の在り方を照射することは必要な作業である。本研究計画では、ドイツ経済思想の生成、受容、変容を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二次大戦後の経済学は、「国際化」が掛け声でもありまた実態でもある。ドイツ固有の、あるいはフランス固有の経済思想というものはなくなり、北米が発信の中心ではあるものの、国際的な経済学の在り方というものが普通となった。それは教義の共有という意味で進歩ではあるが、それぞれのお国訛りの思想が消滅したという意味では、功罪なかばする現象だといえる。本研究では、ドイツ経済思想の生成から消滅までを射程にいれて、研究を行った。

研究成果の概要(英文)：Germany's economic thought used to be dominant at least well into the period of the outbreak of WWI, but today there are only few who understand its significance. It is a forgotten discipline. Germany's international status is still high, especially in EU, but not as high as it used to be in world politics before. Also, with the so-called "globalisation", standardisation of economics has progressed, and the ideas unique to each country and region, especially political and economic ideas, disappeared. Although such a state of economics is inevitable, but it is necessary to reflect on the political and economic ideas of the times when countries and regions played an important role, and conversely, by doing so, it is possible to irradiate the state of modern economics today. In this research, we clarified the formation, acceptance, and transformation of German economic thought.

研究分野：経済思想

キーワード：ドイツ歴史学派 オーストリア学派 カール・メンガー 日本経済思想史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

カール・メンガー研究を重ねる過程で、ドイツ経済思想の重要性を認識するに至った。そこで、ドイツ経済思想史についての一書をまとめるべく、いままで公表された論文については改訂し、さらに必要な部分を加筆するという形で、研究を推進する予定であった。

2. 研究の目的

現在はグローバル化の時代と言われる。別の言葉で言えば、現在では、各国別、各地域別の経済思想というものは考えにくいことになる。しかし、歴史的にいつもそうであったわけではなく、過去においては、それぞれの国の個性が刻印された経済思想が存在していた。本研究は、ドイツ語圏を対象に、そこで生まれた経済思想の特質を明らかにすることが企図されている。これによって、逆に現在の経済思想の特質を考えることが可能になる。

3. 研究の方法

1. で述べたとおりだが、改訂と書き下ろしによって、研究を推進させることを試みた。

4. 研究成果

本研究の成果は、大きく二つの部分に分かれている。それぞれは全体の研究計画のなかに位置づけられるが、研究の性格付けはやや異なるので、以下分けて説明したい。まずは、ドイツ経済思想それ自体の特質を扱った部分である。

同じ「分業」という現象が、英語圏とドイツ語圏では別の形で解釈されることを明らかにした。アダム・スミスにおいては、分業は上からの意思ではなく、自発的、自律的に展開されている感が強い。ドイツ歴史学派の先駆と言われるフリードリヒ・リストは異なった考えをもって、分業についてはその統一体である側面が強調されている。この観点から、国内の分業は可能であるが、国際分業は不可能であるとされている。つまり、リスト固有の考えからきているが、国内においては、統一的な意思が想定可能だが、国と国の間では、そのような統一的な意思は存在しえない、ということなのである。ここに、同じ分業という現象をめぐる二人の根本的な理解の相違が存する。研究成果は、イタリア経済思想史学会(STOREP 年次総会)で報告された。本研究のこの部分は研究途上であり、先行文献のさらなるフォローを含めて、論文の改訂を行う必要がある。

つぎに、全体の研究プログラムの中に位置付ければ、ドイツ経済思想の変容・消化を扱った部分になるが、ドイツ経済思想の日本への伝播を、福澤諭吉、ギャレット・ドロップァーズ、そして小泉信三について論じた。福澤についてはネガティブな結果が、そしてドロップァーズについて肯定的な影響関係が認められた。小泉はドイツに滞在しており、シュモラーそのほかの経済思想を学習しているが、小泉本人の政治経済思想にたいしてそれが強い影響を与えた形跡は認められない。慶應義塾の創設者である福澤がドイツ流の学問にとくに強い関心を抱いた形跡はなく、『学問のすゝめ』そのほかの著作で感じとることができる欧米既存文献の影響は主として、アメリカ、イギリス、フランスのそれに限られる。ハーバードから招聘されたドロップァーズは親ドイツ派であり、その財政学講義はおおむねドイツ財政学の枠組みで展開されている。また、小泉はさらに下の世代であるが、ドイツに滞在してはいるものの、またドイツ政治経済思想を熱心に「学習」しているものの、自らの思想に骨肉化しているとはいえない。これが、慶應義塾関係者を中心においてみた場合のドイツ経済思想の伝播、消化の状況である。従来、故飯田鼎氏の研究などにみられるように、東京帝国大学とドイツ歴史学派、あるいはドイツ政治経

済思想との関係については我が国でも厚い研究の蓄積があるが、私立大学を舞台にした研究は非常に少ない。その意味で、慶應の理財科、経済学部を対象にした本研究には一定の意味があると考えられる。これらの研究成果は、経済学史学会関東部会、そして日本経済思想史学会年次大会などで報告された。なお、研究代表者の小泉信三論については、つとに次の書籍で言及、評価の対象となっているむね、付記する。

小河原正『小泉信三 天皇の師として、自由主義者として』中公新書、2018年11月。

また、福澤にかんしては、二回の口頭報告(うち一回は、福澤論吉協会の土曜セミナーでの報告)に基づく論考としてはつぎのものがある。厳密には学术论文の形式ではなく、一般向けの講演をもとにまとめたものであり、学术论文として公表するには、さらに形式、内容を整える必要がある。

「慶應義塾とフランス・ウェーランド」『三色旗』2018年12月、821号、pp. 15-28.

以上の作業をふまえて、欧文単著の刊行を年来目指しているが、すでに公表した論文の改訂や全体の構想の再構築などが必要であり、2019年4月の時点で、公刊のめどは残念ながらたっていない。現在、想定している単著の構成を以下にあげる。

Title: German Economic Discourses: Foundation, Reception and After

1. Introduction
2. Wilhelm Roscher and Classical Economics
3. Roscher's Lecture Notebooks
4. Karl Heinrich Rau and Wilhelm Roscher
5. Hermann Heinrich Gossen: A Forgotten Economist
6. German Historical School: A Survey
7. Carl Menger in the 1860s
8. Menger's Subjectivism
9. Adam Smith's Reception in German-speaking Areas
10. Menger's Monetary Theory
11. Menger and Economic Liberalism
12. Menger's Attempt to Revise the Principles: An Aborted Trial
13. German Historical School Comes to Japan
14. Garret Droppers and the German Historical School
15. Shinzo Koizumi in His Young Days: His Stay in Germany
16. Epilogue

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

池田幸弘「小泉信三の筆記ノート 堀江帰一「財政学」筆記ノートを中心に」『近代日本研究』査読無し、33巻、2016年、pp. 1-20.

〔学会発表〕(計4件)

池田幸弘「福澤諭吉の政治経済思想：フランス・ウェーランドとの対比を中心に」福澤諭吉協会第131回土曜セミナー（招待講演）2017年11月25日。

Yukihiro IKEDA, Division of Labor and Economic Development: A Series of Communitarian Interpretation, read at the annual meeting of Italian Association of History of Political Economy, 2016年6月24日。

池田幸弘「小泉信三の西欧体験：青年小泉信三の日記を中心に」日本経済思想史学会年次大会、2016年6月5日、愛媛大学。

池田幸弘「ギャレット・ドロップーズの経済思想：『財政学講義』を中心に」第二回経済学史学会関東部会、2016年03月12日、立教大学。

〔図書〕(計1件)

Tamotsu Nishizawa and Yukihiro Ikeda, "From New Liberalism to Neoliberalism: Japanese Economists and the Welfare State Before the 1980s" in: LIBERALISM & THE WELFARE STATE, edited by Roger E. Backhouse, Bradley W. Bateman, Tamotsu Nishizawa and Dieter Plehwe, 2017, Oxford University Press, pp. 75-100.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。